



アコースティックバンド「テノヒラ」のボーカル 愛南町出身のkikuさんが綴るふるさとエッセイ

—あいなん音故地新— 「チャンス。」

あたしたちには明日は見えん。明日がどうなるのか、1年後、10年後どうなつとるのが、誰も知ることはできん。やから今を精一杯やるしかない。

休日にボーッとテレビを見てたら、箱根を走ったランナーの物語が流れてた。あと数メートルというところで襷を繫ぐことのできんかったランナー。しばらくの間はそれまでの自分を悔やむ時間が続いて、その思いは“毎日を全力で生きる”という答えに繋がる。当時のことを思い出しながらくちびるを噛み締めて話す彼の言葉には説得力があった。あの悔やしさと自分の人生観が変わつたと。

こんなチャンスを与えられたのは彼が走ることと真剣に向き合い、仲間と共に困難を乗り越えて、全力で走り抜いたからやと思う。努力は必ず報われる。結果、順位つていうものだけじゃなく、長い人生の中で報われる時が必ず来るとあたしは信じてる。

そして、頑張ればご褒美にチャンスは必ず訪れる。それをチャンスと捉えられるが、モノにできるかは自分次第。テレビの中から叱咤された気がした。これはあたしのチャンス。

(テノヒラkiku)

あいなん物産探訪 その④

「ブリ」

興洋水産

だいすけ
竹田 大祐さん



ブリは水温が下がる師走に脂がのって旨くなる魚であることから漢字では「鰯」と書く。これから旬を迎える魚だ。

久良湾でブリ養殖を営む有限会社興洋水産の竹田大祐さんを訪ねて、餌やりの様子を見学させていただいた。餌やり機から飛び出す餌にブリが勢いよく群がっている。水面に水しぶきがあがり、こぼれた餌を求めてカモメやトンビが生簀の周りを飛来する様子は迫力満点。興洋水産では魚粉などが入った粉末の餌に、生魚の切り身を混ぜて固形にしたものをブリに与えている。餌の量や混ぜる割合は、天候や水温、ブリの食いつ

きなどを見極めて微調整するのだという。

久良湾は昔からブリ養殖が盛んで、久良漁協の「久良のぶり」は水揚げ翌日に家庭に届くとあって県内外から好評を得ている。

「養殖は自然相手なので台風や赤潮のときは大変だが、やりがいのある仕事。稚魚が成長する様子を見るのは楽しい」と笑顔で話す竹田さん。刺身や照り焼きも美味しいが、寒い日には、体が温まるブリしゃぶがおすすめだという。

